

2025 年 10 月 5 日 説教「内なる光と暗やみ」

ルカの福音書 11 章 33～41 節

11 章は後半から、パリサイ人や律法の専門家との関わりについて、語られています。前段では、食事前に手を洗わなかったイエスに端を発して、語られた主の言葉を学びました。今朝はそのテーマが続きます。

1. あかり (33～36 節)

- ①あかりをつけて (33) 「『**だれも、あかりをつけてから、それを穴倉や、枡のしたに置く者はいません。燭台の上に置きます。入ってくる人々に、その光が見えるためです。』**』

当時の家庭においては、燈心のあるともしび皿に灯油を入れてあかりをつけました。民家の燭台のあるものは、台座が木製であかりをつける枝も三つぐらいでした。ゼカリヤ書 4 章に出てくる燭台は、台座が青銅製で枝が七つあって、35 センチもある大きなものでした。それは神の臨在を表すものでもありました。ここで、イエスはあかりにたとえに用いて教えられます。即ち、大小はともかく、あかりは使いもしない穴倉に置いたりしません、と言われます。穴倉とは家の地下に作られた、ぶどう酒や油の貯蔵室でした。また、枡の下にもおきませんとも言われました。枡とは粉、麦などを量ることや、あかりを消す道具としても用いられました。ともかく、あかりは部屋に入ってくる人々が、周辺確認して、行動するためにあるのです。

- ②からだのあかり (34) 「『**からだのあかりは、あなたの目です。目が健全なら、あなたの全身も明るい**が、しかし、目が悪いと、からだも暗くなります。』

確かに、身体において、目は光を受ける役割を果たしています。目を通して、周囲を見るのに用いられます。ここでは肉体の目を語りながら、霊的な眼のことを言われています。霊的な眼が健全であれば、存在全体が明るくなります。逆に霊的な眼が曇れば、存在全体が暗くなるのです。

- ③全身が明るく (35～36) 「『**だから、あなたのうちの光が、暗やみにならないように、気をつけなさい。もし、あなたの全身が明るくて何の暗い部分もないなら、その全身はちょうどあかりが輝いて、あなたを照らすときのように明るく輝きます。』**』

ここでははっきりと「内なる光」として、人の存在を照らす光について述べられています。その存在に光があるなら、その人は明るく照らされるわけであり、この光が消えて暗やみにならないように気をつけよ、とイエスは教えてくださっているのです。

2. きよめの洗いをされなかったイエス (37～39 節)

- ①パリサイ人が (37) 「**イエスが話し終えられると、ひとりのパリサイ人が、食事をいっしょにしてください、とお願いした。そこでイエスは家に入って、食卓に着かれた。』**

イエスが話しを終えられたときに、ひとりのパリサイ人がイエスを食事に招きました。もう少し話しを聞こうとしたと思われます。木に登ったザアカイ

も家にイエスを招いています(19章)。イエスはその招待を受け容れて、その食卓に着きました。

②きよめの洗い(38)「**そのパリサイ人は、イエスが食事の前に、まずきよめの洗いをなさらないのを見て、驚いた。**」

ユダヤ人は食事をするにあたっては、足を洗い、会食者は自分で手を洗いました。ある者は食卓に着く前に全身の水浴をしました。彼らはある面では几帳面で厳格でした。上品に振舞うことが求められたのです(「イエス時代の日常生活」)。ところが、イエスは食事前に手を水に浸すことをなさいませんでした。そこで、このユダヤ人は驚き、心の中でイエスをさばいたのです。

③外側はきよめるが(39)「**すると、主は言われた。『なるほど、あなたがたパリサイ人は、杯や大皿の外側はきよめるが、その内側は、強奪と邪悪でいっぱいです。』**」

杯は水やぶどう酒を飲むのに用い、庶民はメッキの平たい皿を用いて食事をしました。その内容は、パンとオリーブ、いなご、魚など簡素でした。裕福な人は魚、子やぎ、野菜などを食べ、富者は金、銀の食器やナイフ、スプーンなどを用いたとのことです(「イエス時代の日常生活」)。イエスは言われました。「あなたがたは、杯や大皿の外側をきよめても、内側は強奪や邪悪で満ちていますね」と言われました。食事前に清めの洗いをすることにこだわる人が、その心の中においては、強奪を思い描き、邪悪なことを考えているのですかと迫っているのです。

3. 外側と内側(40~41節)

①内側も造られた(40)「**『愚かな人たち。外側を造られた方は、内側も造られたのではありませんか。』**」

し「愚かな人たちよ」と厳しく呼びかけて、言われたことは、「外側を造られた方は、内側も造られたのです」と言われました。人の存在は肉体だけではないのです。人は見えない内側があってこそ、その存在があるのです。そして、それをも含めて主は人を創造されたのです。

②うちのものを施しに(41)「**『とにかく、うちのものを施しに用いなさい。そうすれば、いっさいがあなたがたにとってきよいものとなります。』**」

人の内なる思いは、外側に現れます。パリサイ人はその行為を律法に従って、なしました。ここで、イエスを食事に招いた人は、試す心もあったかもしれませんが、善意から出た行動であったかもしれません。しかし、イエスはここで、「内から出るものは施しに用いなさい」と言われています。「何事でも、自分にしてもらいたいことは、他の人にもそのようにしなさい。」(マタイ7:12)とイエスは教えられています。心の内側で主から突き動かされて行っていく愛の業は用いられ、人の内にきよさが生まれてくると教えられています。ここでのきよさとは、外側と内側が一つになることでありましょう。hg

《結論》今朝の聖書箇所は二つの課題をイエスは語っておられますが、その二つは根底においてつながっています。

最初の段落では、あかりの役割とその置く場所について述べられました。あかりは、周りを照らす場所に置かれこそ、生活や仕事をするのに役割果たします。また、イエスはからだのあかりは目とされました。その上で、目が光を受け入れる役割をなし、全身を照らすことを述べられました。そして、光が入っているからだは明るく輝くということです。だからこそ、からだは暗くならないように気をつけなさいといわれたのです。

次の段落では、食事にイエスを招いたパリサイ人は、イエスを食事前に手を洗わなかったことから、イエスを心の内で咎めました。イエスはあえて、そうなさったのでしょう。彼らの心のうちにある思いを読み取られて、外側をきよめてもその内側には邪悪な欲望が渦巻いていると指摘されたのでした。そして、創造主は外側の身体と同様に内側も造られたと述べられたのです。

この二つの話しにおいて、主イエスはいずれも外側と内側を比べつつ、内なる世界を外に見せようとされています。あかりのことから、目から入る光のことを述べ、「目」は霊的眼を「光」はまことの光のことを述べようとされています。一方、パリサイ人とのきよめの話しについても、イエスは外側のきよめを強調するパリサイ人に対して、その内側において強欲があるのであれば、きよめになっていないとするのでした。そして、創造主が造られた内側に注目させるのです。しかし、外側を飾るが、内側には様々な問題が山積みであるのはパリサイ人ならずとも、私達も同じでありましょう。

こうしたイエスの教えについて、比較的すんなりと受け入れる向きもあるかもしれませんが、パリサイ人は案外そうではありませんでした。あのパリサイ人でユダヤ人議会の議員であったニコデモはイエスから「新しく生まれる」ということを言われた時に、それを霊的新生とはとらず、「人は老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度母の胎に入るのですか」(ヨハネ 3:4)と問うています。御霊によって生まれるということは理解しにくかったのです。この聖書箇所のパリサイ人たちも内側の光とか、内側のきよめのことを語られても、あくまでも外側のことにこだわっていたと考えられます。

イエスは「光が暗やみにならないように気をつけなさい」と戒められ、「うちのものを施しに用いなさい」と言われました。人がこのことを理解するには、「すべての人を照らすまことの光」(ヨハネ 1:9)がイエスであることを知る必要があります。イエスが光であることを信じるならば、主イエスが私たちの内側を照らし、暗やみから解放してくださいます。「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今や、主にあって光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。光の結び実は、善意と正義と真実です。」(エペソ 5:8~9)とあります。信仰により内側にきよめも備えられるのです。外側のことに囚われがちな私たちですが、もう一度内側の自分に目をとめましょう。キリストは罪深い私達に光を届け、恵みの実を与えてくださる主です。仰ぎましょう。

は外側においては、律法の求める神への献身を実行していました。それについては、43 節にあるように、イエス自身も「なおざりにしてはならない」と伝えています。しかし、その前に「これこそしなければならない」と述べられています。それは「公義と神の愛」だと言うのです。これについては、律法のなかにおいて「はるかに重要なこと」とイエスは言われています（マタイ 23:23）。公義というのは、人間の義ではなく、神の義です。「神の国と神の義を求めなさい。」（マタイ 6:33）とありますが、それこそが信仰者が求めるべきものです。神の義こそが不義なる人間を義と認めることできるのです。すなわち、神の義こそが人間を救うことができるのです。パリサイ人が追求していた律法そのものは正しいのですが、それを遵守しているかどうかを、人間が監視したり、制御したりすると、本来の律法の根本精神が見失われてしまうのです。

それでは律法の根本精神とは何でしょうか。それはもう一つ述べられた、「神の愛」と関係しています。マタイの福音書ではそこを、「あわれみと誠実」と記しています。律法学者が「律法のなかで何が大切ですか」と問うた時に、イエスは第一に、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神を愛せよ」（申命記 6:5）とし、第二には「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」（レビ記 19:18）とし、これらこそが「律法全体と預言者」だとしています（マタイ 22:36～40）。つまり、この二つに旧約聖書全体がかかっているということです。言い方を換えれば、これらを見失ってしまえば、律法が生きて働く可能性はなくなってしまうということです。実を言うと、ルカの福音書 10:26 以下を見ると、律法学者たちもそれなりに捉えていました。しかし、イエスによって「良きサマリヤ人」のたとえ話が引き出されるほどに、律法学者たちのうちでは、その理解と実践が空回りしていたのです。46 節において、人々に荷物を負わせても、自分では荷物に指一本もさわろうともしないと、イエスから痛撃されたように、そこにパリサイ人や律法学者の盲点があったのです。公義と神の愛を放置していたのです。

それでは、私達はどうかという、気をつけないとパリサイ人と同じような見方をしてしまうことがあります。人の行動や言動を心の中でさばいたりすることはないでしょうか。それも、聖書の言葉を伝家の宝刀のように振りかざして、はかりにかけてしまうことがあります。神の義と神の愛をなおざりにしてしまっていることがないでしょうか。自らのうちに注がれる主の救いの恵みを忘れたくありません。主イエスがこれほど激しく言われているのは、クリスチャンにも注意をされているのだと思います。まずは、自分の胸に手をおいて、祈りましょう。御言葉よって生きる道を求めていきましょう。